



2025-2026 RI 会長:フランチェスコ・アレツツォ 2570 地区ガバナー:坂口孝 会長:晝間和弘 幹事:後藤健

30号 3427例会 2026年 2月 19日(木)

## 🌸 会長の時間 🌸

### 晝間和弘会長

今日は、ご存知無い会員の為に地区のグループ分けについて説明いたします。

日本全体では 34 の地区があり、各地区の規模に応じて、小規模地区で3から5分区程度、中規模地区で6から8分区程度、大規模地区では8から12分区程度に分かれています。

埼玉県におけるロータリーの歴史は、1951年川越に最初のロータリークラブが創立されたことから始まり、1988年7月1日、重要な転換点を迎えます。新生埼玉地区として発展分割が実施され、従来の第257地区と第277地区の2つの地区に分割されたのです。これは地区の規模拡大に伴う管理運営の効率化のための措置でした。その後、国際ロータリーの地区番号体系の世界的な統一化に伴い、現在の「第2570地区」という呼称に変更されました。

現在、我が地区は埼玉県西北部を管轄し、当初44クラブでスタートしたものが、30年以上の発展を経て一時は約50クラブまで成長しましたが残念ながら現在は44クラブとスタート時に戻ってしまいました。ちなみにクラブ数が減り続けると他地区と合併もあり得るとのことです。そして5つの分区に分かれて効率的な管理運営を実施しています。

「国際ロータリーにおけるIMの歴史の歩み」  
私たちが参加するIM、インターシティミーティングについて、その歴史的背景と意義、そして我が第2570地区の歩み、さらに我々第3グループにとって特別な意味を持つ今年度のIMについてお話しさせていただきます。

IMの源流は、1950年代から1960年代にかけて開催されていたIGF(インターシティ ジェネラル フォラム)都市連合一般討論会に遡ります。これは、地理的に近い複数都市のロータリークラブが集まって情報交換や討論を行う場でした。その後、IGFはより組織化・体系化され、ICGF(インターシティ カウンシル ジェネラル フォラム)へと発展しました。



そして1980年代以降、国際ロータリーの教育プログラムの体系化が進む中で、単なる情報交換の場から、体系的な研修プログラムを提供する「IM(インターシティミーティング)」へと進化したのです。この変遷は、ロータリーが「親睦の組織」から「教育と実践を重視する組織」へと発展してきた歴史そのものを反映しています。

現在、IMは地区内で開催される教育・研修を目的とした重要な集会として位置づけられています。その主な役割は4つあります。

第一にロータリーの理念、奉仕プロジェクト、リーダーシップ等について学ぶ教育機会の提供。  
第二に、クラブ間で優良事例やアイデアを交換する情報共有の場。

第三に、ロータリアン同士の交流を促進するネットワーキング。

第四に奉仕活動への意欲を高めるモチベーション向上の機会です。

坂口ガバナーが掲げられた「クラブの独自性を尊重しながら、強いクラブをつくる」です。故坂口ガバナーの理念を引き継ぎ相原ガバナーが責任を持って地区を導かれる中でのIMであり、この重みをしっかりと受け止め参加いたします。

第3グループにとって特別な今年度のIMそして、ここで特にお伝えしたいことは、第3グループは、次年度から2つのグループに分かれることが決定しております。これは、ガバナー補佐の負担軽減や、より効率的な運営を目指すための組織再編です。

これまで第3グループとして共に学び、交流を深め、奉仕活動に励んできた仲間たちが、一堂に会する最後の機会となるのです。もちろん、来年度以降も新しいグループの中で交流は続きますが、今の第3グループという纏りでのIMは、今年度が最後となります。この歴史的な節目を迎えるにあたり、今年度のIMは私たちにとって特別な意味を持ちます。これまでの絆を確認し、これまでの歩みを振り返り、そして新しい時代への橋渡しをする大切な機会です。

IMは、単なる形式的な集まりではありません。

故坂口ガバナーの志、相原ガバナーの決断、第3グループの分割、と全てが重なる歴史的なIMです。ぜひ、一人でも多くの会員の皆様にご参加いただき、この記念すべきIMを共に体験し、思い出に残る有意義な時間になりたいと思います。そして、学んだことをクラブに持ち帰り、実践していくことで、新しい時代の第2570地区の発展に貢献してまいりましょう。

最後に高橋第3グループガバナー補佐よりメッセージがあります。「10クラブ最後のIMが誇りを持って成功するよう皆様のご参加とご協力を心よりお願い申し上げます」との事です。

**<幹事報告> 後藤健幹事**

3月からはお弁当となります。お弁当の個数集約の為、回覧しておりますので事前に出欠席宜しくお願い致します。



又、2/25のIMにはクラブタイ、ブレザー着用で出席お願い致します。

**<ニコニコBOX> 新井格SAA**

晝間和弘君、後藤健君、繁田光君、新井格君、宮崎正文君、白幡英悟君、菅野茂実君、駒形一人君

小林会員イニシエーションスピーチ楽しみにしています。ファミリーレストランの皆様、長い間大変お世話になりました。

津藤淳也君

欠席申し訳ございません。

**本日¥50,000 累計¥1,255,116**

**<出席報告> 駒形一人委員**

会員数	出席数	出席率	前週修正率
40名	26名	70.20%	-----

事前欠席連絡6名

**■回覧、配布物**

- ① ガバナー月信1, 2月合併号
- ② 3/5 第5回クラブ協議会出欠表
- ③ 3/26, 4/2, 4/9, 4/14, 4/16 例会出欠表
- ④ 2026年3月11~12日親睦旅行出欠表
- ⑤ 2/25 IM所沢ミュージズ 出欠表
- ⑥ 3/10 入間市国際交流会イベント
- ⑦ ハイライトよねやま Vol. 311
- ⑧ 4/27~28 クラブ活性化セミナー
- ⑨ フードバンクいるま活動報告
- ⑩ 2, 3, 4月プログラム
- ⑪ 事務局メールアドレス変更
- ⑫ 週報29号
- ⑬ 本日の卓話資料
- ⑭ 木下サーカス割引券

**■イニシエーションスピーチ■**

**小林春好会員**



1958年4月7日生まれの4人兄弟の3番目。現在67歳です。出生地は入間市宮前町。近隣の豊岡保育園から豊岡小学校入学。下校後は毎日のように近所の友達の家、または入間川で魚釣りをし、夕日が沈むまで遊ぶ毎日でした。豊水橋から見る入間川、奥多摩、秩父の山々が原風景。家の前にあった映画館「豊岡座」の記憶に残っています。小学4年生後半、少年野球チーム「4区ファイターズ」を結成。監督は近所に住む因泥文彦氏。因泥氏は後に指圧を学び、ハワイやロスエンジェルズに指圧を広めた第一人者の方です。

子どもの頃、長兄が聴いていたビートルズ、ローリング・ストーンズの初期の曲や長兄と行ったジェフ・ベックの伝説の日本コンサート。今でも心に残るロック・ナンバー、懐かしい曲と音です。

練馬区立第三中学校入学。1970年当時、練馬区の公立進学校として有名で、西武線沿線から多くが越境入学していました。高校は明治大学附属中野高校へ進学。スキー部入部を希望したが、アルペンがなくノルディックだったため、アイスホッケー部に入部。東京都内にはアイスホッケー部が3校（法政一高、日大鶴ヶ丘、明大中野）しかなく、3校でリーグ戦を行う。明治大学アイスホッケー部の先輩（ほぼ全員北海道出身）から指導を受ける。

青山学院大学経済学部入学。楽しい大学時代を過ごしました。

中学生の頃、6歳違いの長兄がザック一つで世界一周旅行（ハワイ、アメリカ、ヨーロッパ、トルコ、中東、アフガニスタン、イラク、イラン、インド、中国）へ出発。帰国後の話を聞き、自身も世界一周を計画し地図を見て心を躍らせるが、費用面で親に反対され断念。その後、登山に夢中になり海外の山を目指すようになる。長兄が中央大附属高校で山岳部に入り、山の話聞いたことも影響しています。

日本国内の登山、ロッククライミングから、ヨーロッパアルプス、ネパール・ヒマラヤ、南米大陸へ遠征。下山後はイタリア、フランス、スイス、南米（ベネズエラ、コロンビア、ペルー、ボリビア）を旅行。南米では1泊1ドルの宿から1,000ドルのホテルまであり、「人は本能、またはビジネスで移動する生き物だ」と実感する。

27歳の時、車山高原にリゾートホテルを計画。1987年12月開業「ホテル ラ・メイジュ」

と命名（フランスの名峰ラ・メイジュより）当初は「ホテル業務 7 ヶ月、登山 5 ヶ月」の生活を計画していたが、好景気による多忙のため登山計画を断念。後に父へビジネスホテル事業のアドバイスをを行う。

主要海外遠征

- ❁1984年：日本山岳会カンチェンジュンガ登山隊 エンジェルフォール左壁 ジャパニーズ・ダイレクト 世界初登攀
- ❁1985年：日本山岳会マナスル・スキー登山隊（無酸素登頂、山頂からスキー滑降を目指す）

日本国内の岩壁登攀、そして海外の大岩壁をめざして、ヨーロッパアルプス、ヒマラヤ、南米でのクライミングを経験してきました。沢山のすばらしい友との出会い、別れを経験してきました。数々の登攀の瞬間、亡くなった友人たちを思い出します。岩壁登攀では一瞬のミスが死につながります。クライミングと「生と死」はいつも考えさせられることでした。難しいルートに挑むとき、仲間の死の連絡を受けたとき、死への恐怖を感じました。

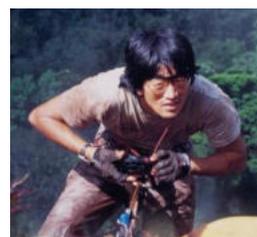
冬の谷川岳の岩壁に行くとき、上野発の夜行列車で、上越線土合駅で降ります。土合駅ホームは、トンネルの地下で地上の駅舎に行くまで、約 70 段の階段を上ります。階段を一段一段のぼりながら、生きて帰れるかと毎回思いました。しかし心のかたすみには、自分だけは死なないと楽観する思い、自信もありました。今、考えると不思議な思いでした。

垂直の岩壁に何日もいると、滑落する恐怖もうすれていく事もありました。

岩壁から墜落死した友をひろいに行ったとき、変わりてた姿の友を見たときは、現実にもどされ恐怖を感じたことがありました。「生と死」を感じる時が一番充実した時間だったのかもしれない。

当時、同じ思いのクライミングをしていた、イギリスのクライマー、アレックス・マッキンタイア（アンナプルナ南壁で墜落死）の半生を著した「One Day as A Tiger」（著者 John Porter）、「羊として 1000 年生きるより、獅子たる一日を生きよ」という古くからの格言。あの当時だけは獅子たる 1 日を生きて、死を思い、一瞬を生きて、生を感じる事ができたことが幸せだったのでしょか。

今でも自問自答してます。



#### 発行 入間ロータリークラブ

- 事務所：〒358-0005 入間市宮前町 1-10 繁田醤油(株)内 Tel. 04-2964-1700 Fax. 04-2965-5788
- Email：irumarc@outlook.jp
- 例会場：丸広百貨店入間店 6 Fバンケットホール Tel. 04-2963-1111
- 例会日：木曜日 12：30～13：30 ■会報委員長：宇野健一

